

第5分科会

子ども理解から子どもの育ちを 考えた保育実践

助言者	広瀬健一郎 (鹿児島純心女子大学人間教育学部教授)
司会者	進藤一哉 (神村学園附属幼稚園)
問題提起者	濱田真実 (せんだい幼稚園)
記録者	木場尚樹 (せんだい幼稚園)
記録者	柿元美咲 (せんだい幼稚園)
ホスト	輿水基 (阿久根めぐみこども園)
ホスト	濱元庄吾 (吹上中央こども園)
運営委員	泉陸洋 (出水聖母幼稚園)

【研究課題】

園の保育者全体で子ども理解を深め、次の保育への手立てに繋げられるような研修体制の構築

【研究・研修の視点】

幼稚園教育要領（文部科学省,2017）「第1章 総則」の「第1 幼稚園教育の基本」では、幼児期にふさわしい活動の展開、遊びを通しての総合的指導、一人一人の特性に応じた指導など、幼稚園教育における重視すべき事項の実施にあたり、「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない」とされている。そのため、教師は園児と生活を共にしながら、園児が今、何に興味を持っているか、何を実現しようとしているか、何を感じているかなどを捉え続けていく必要がある。そういった教師の子ども理解に基づいて、指導計画を作成し、具体的なねらいや内容、配慮事項が適切であったかどうか、環境の構成が適切であったかどうか、園児の活動に沿って必要な援助が行われたかどうかを評価し、改善していくことが重要である。子どもの育ちに応じた保育を行う上では、園児一人一人に対する理解や指導についての考え方を深めるために、互いの指導事例を持ち寄り、話し合い、多角的に評価することが重要であり、子ども理解を深める場の充実が求められる。以上のことからこの研究・研修テーマを設定した。

【研究の手がかり】

- ・ 園の保育者全体で子ども理解を深め、次の保育への手立てに繋げられるような機会として、保育者間の対話を軸とした会議や研修方法を開発する。
- ・ 月案、写真ポートフォリオやドキュメンテーションといった保育記録が園全体として「次の保育に生かしていくためのツール」となるような様式の在り方や活用法について研究する。

【研究計画】

◎令和4年度

- ・ 「保育カンファレンス」を中心とする月案会議の改革。それに伴う保育記録についての改善。

◎令和5年度

- ・ 「保育カンファレンス」の内容を園全体で共有する体制の構築。

【発表の概要】

1 研究・研修テーマのとらえ方

本園ではその月の子どもたちの生活や遊びの様子を振り返ったうえで、翌月のねらいや手立てを考える月案会議を学年毎に行なっている。また、子どもの生活や遊びの様子と育ちを伝える「写真ポートフォリオ」やクラス単位での活動と育ちを伝える「ドキュメンテーション」といった保育記録を定期的に作成している。しかしながら、月案会議はクラス担任のみで検討、作成するため、補助職員や預かり保育担当者まで翌月のねらいや手立てを共有できていないのが現状である。また、作成した写真ポートフォリオやドキュメンテーションをもとにした保育者間での子ども理解の共有や、互いに子ども理解を深めるような取り組みまではできていない。

本研究では子ども理解を保育者全員で深め、かつ保育者全員で次の保育へのねらいや手がかりを多角的に検討する方法を開発できないかと考え、従来行っている月案会議の時間を活用して保育カンファレンスを行うことにした。

2 研究の内容

本研究は、森上史朗が提起した「保育カンファレンス」の条件（正解を求めようとしない／相手を批判したり、論争しようとしたりしない等）を手掛かりに、保育者間の対話を軸にした「保育カンファレンス」を実施し、園全体で子ども理解を深め、次の保育への手がかりを検討し、月案を立案する体制を確立しようとするものである。「保育カンファレンス」では佐藤学らが提起した「授業カンファレンス」の手法に学び、保育の方法ではなく子どもの姿について話し合い、その子の何が育ちつつあるのかに目を向ける。特に、気になる子どもや特別な支援を要する子どもについては、関係論的な視点から子どもの育ちを捉えるよう心掛ける。そして、これらの遊びの様子や育ちを踏まえて翌月の手立てについて話し合い、月案を立案する。

3 研究の方法

クラス担任や補助職員、預かり保育担当者など、その学年に携わっている保育者全員で実施する。参加者の1人がファシリテーターを務め、各担任がすべての子どもの遊びや生活の様子を報告する。

担任の報告をもとに、参加者全員で「子どもの姿」、「育ちつつある事柄」、「次の手立て」について話し合い、月案を立案する。月に1回、学年（各3クラスずつ）ごとに行いながら、保育カンファレンスの内容、話し合いの進め方、月案の形式を検討する。

4 実践例

(1) 「保育カンファレンス」の内容および進め方と月案

①各担任は、写真ポートフォリオやドキュメンテーションを縮小印刷したものを活用しながら、子どもの遊びや生活について報告し、記録係がそれらを模造紙に貼っていく。この時、記録係は写真に登場する子どもの名前がわかるよう、写真に「名前シール」を貼り付ける。またどのような場面なのかを付箋にメモし、模造紙に貼り付ける。②その遊びや生活の様子から見える育ちや学びについて、「育みたい資質・能力シール」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿シール」「5領域シール」、「マーガレット・カーの5つの視点シール」を貼り付けながら話し合う。このプロセスを子どもの遊びや生活の場面ごとに繰り返し、すべての子どもを網羅するように話し合う。③これらの遊びの様子や育ちを踏まえて翌月の手立てについて話し合い、模造紙に書き込む。④完成した模造紙が月案となる。

(2) 「保育カンファレンス」を通じた保育の質の向上

補助職員や預かり保育担当者も参加することでそれぞれの保育者の思いや考え、工夫などを知ることができ、保育者間の繋がりをより深め、クラスで過ごす時間でも預かり保育の時間でも、それぞれの子にあった関わり方や保育環境の設定を保育者全体の共通認識のもとで行うことができるようになった。また、写真ポートフォリオやドキュメンテーションを保育カンファレンス内で活用することで、遊んだことや生活の様子だけを記録するのではなく、子どもの育ちと共に記録するよう心掛けるようになった。そして、子どもの「問題」や「障がい」として捉えていた行動の意味を、「育ち」や「伸びゆくもの」として肯定的に捉えなおすことができたり、今伸びつつある姿を生かした次の手立てを全員で共有して子どもに関わったりすることができるようになった。

5 まとめ

保育カンファレンスをすることで、園の保育者全体で子ども理解を深め、共通認識のもとにそれぞれの子どものあった関わり方をすることができている。子どものよさや可能性を見出すような意識も保育者間にも徐々に浸透しており、今まで以上に前向きに保育に臨んでいると実感している。

6 今後の課題

保育カンファレンスの時間がどうしても長引いてしまうこともあるので、今後も継続して行う中でファシリテーションスキルや対話の質を向上させていきたい。また、学年で行っている保育カンファレンスの内容を園全体の保育者に効果的に共有できる方法についても今後研究していきたい。

【討議の柱】

- ・ 保育者間で子ども理解を深めたり手立てを共有したりするための時間確保の工夫について
- ・ 一人一人の子どもに対する理解を深めるには、どのような方法（研修・記録）があるか。

【討議内容】

1 問題提起に関する質疑応答

- (問) 保育を行う際に撮影した写真を使って子どもの育ちを捉えていたとの話だったが、写真を用いることで子どもの捉え方に変化はあったか？
- (答) 写真、写真ポートフォリオやドキュメンテーションなどを使用することで、その時にどんな物を使って、どこで、どのように遊んでいたかというイメージが簡単に共有できるようになり、情景が思い浮かびやすい分、その子のことや育ちを捉えやすくなった。
- (問) 保育カンファレンスは職員全体で共有するために始めたものか？また、気になる子だけでなくクラス全員を保育カンファレンスの中で話をする意図とは？
- (答) 以前は担任同士だけで子どもの姿を共有することが多かったが、実際の保育では補助職員や預かり保育の担当など、さまざまな保育者が関わっている。園全体で同じ方向を向いて保育をするためには、保育者全員で子どもの姿や育ちを共有することが重要だと考えており、保育カンファレンスの目的の1つでもある。また多くの保育者間で語り合うことで子どもの姿を多角的に捉えられ、一人一人の子ども理解を深めることにも繋がっている。保育者の話はどうしても気になる子に焦点が当てられることが多い。気になる子・気にならない子に関わらず全ての子どもをきちんと理解できるよう、保育カンファレンスではクラス全員の名とその姿を語ることで必要な手立てを明らかにし、どの子にとってもより良い関わりができるようにしている。
- (問) 子ども同士でのトラブルは保育者間でどのように共有しているのか？
- (答) 「トラブル=問題」として捉えるのではなく、その出来事が起こったときその子はこういったことを伝えたいと思っていたのか、その出来事からその子の育っている姿を捉えられないかなど、肯定的に子どもの姿を捉え合うようにしている。

2 グループ討議

- (1) 保育者間で子ども理解を深めるための時間確保の工夫
- ・ 全職員で集まることはなかなか難しいため、学年ごとで集まりその時間は他の学年の先生が代わりに保育を担当するようにしている。
 - ・ 一緒にクラスに入った保育者同士で、保育の合間時間に子どもの姿を共有している。
 - ・ 降園後の子どもたちが少なくなった時間を活用している。
 - ・ 年度初めに午後を休園とし、職員全員で研修の場を設けている。その後は月1回程度数名ずつ研修をしている。
 - ・ 午睡時間を活用して職員間の情報共有の時間を取っている。
 - ・ 曜日を分けて各学年で話し合いの時間が取れるようにしている。
 - ・ 集まる時間の確保が難しいので、ノートを活用して伝えておきたいことはそこに記録し、時間が空いているときにそれぞれ確認し、情報共有している。
- (2) 子ども理解を深めるための方法（研修・記録など）
- ・ 写真を撮ったり動画を撮ったりすることで子どもの様子を記録し、それらを他の保育者と見合うことで子どもの手立てを考えていく。
 - ・ 全保育者がある1つのクラスの保育を見て、その後に全員で振り返りながら子ども理解を深めるような研修を行っている。

- ・アプリを活用して子どもの遊びや姿を記録して、全保育者で共有している。
- ・できるようになったことを通知表として作成し、職員と共有している。
- ・年度初めに毎年家庭保育をお願いし、園全体での研修を行い、子ども理解を深めている。

【助言者のまとめ】

1. はじめに

写真ポートフォリオやドキュメンテーションに取り組む園は増えているが、それらをもとに話し合いをする園は少ない。子どもの育ちの記録を保育者間でどう共有するか、どう語り合うか、幼稚園教育要領でも記録の共有は課題の1つとなっている。しかしながら、「ただ」語るだけでは保育の質は上がらない。語りの技術が必要である。

2. 語り合いの前提

前提の1つ目は、「子どもの育ちのよさと育ちのプロセスの評価」の重要性である。子どもを「できる／できない」で評価するのではなく、一見できないように見える姿の中からもその子の伸びている姿を積極的に見出そうという視点、すなわち、幼児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるものなどを把握し、指導の改善に生かすようにすることが大切である。2つ目は、「関係論的に子どもの育ちを理解する」ことである。能力というのは、どんな環境におかれているかによって異なって現れる。家庭では快活だが、園ではおとなしい子。どちらもその子の姿であって、ただ違うのはその子を取り巻く関係である。それは気になる子を見るときも同様である。気になる子の行動をその子の個性と決めつけず、その子を取り巻く人間関係、その子への関わり方や取り巻く園環境などが、その子の問題行動を引き出しているのではないかと考える。3つ目は、「肯定的にみること」が重要である。肯定的にみるとは、いいところ探しではなく、否定したくなるような事柄の中から、信頼できる部分、育ちつつある姿を見出すことである。4つ目は、「マーガレット・カーの5つの視点から捉える」ことである。5つの視点とは、興味・関心／熱中／チャレンジ／表現／責任ある行動の5つのことであり、非認知能力の出現をとらえる視点でもある。このような前提から、とくにファシリテーターには、肯定部分の発見（関係論的発達観を持つ）を促すことが求められる。

3. 何を語り合うのか

どうやればいいのかという保育の手立てや方法を話題にすると、経験や立場の違いにより対話が困難になりやすい。また先輩が若手に助言するような語り合いでは、対話にならない。一方、自分の見た子どもの姿は「事実」であるため、対話が活性化しやすい。保育のやり方を評価するのではなく、子どもの姿を捉え、語り合うことから始める（省察する）。その際、子どもの名前を出しながらその子の遊んでいる姿をとりあげ、そこから感じたこと、考えたこと、その子の行為の裏側にある気持ちを考察して語り合う。ファシリテーターは参加者が子どもの姿をじっくりと語れるようにし、子ども全員が取り上げられるように進行する。また、子どもの姿について話しているときには、その子への手立てに関する話題をしないよう注意を促す。

4. どのように語り合うのか（対話のスキル）

次の4つを意識し語り合う必要がある。①「正解」を求めようとしない／本音で話せる場であること（何を言ってもよい、意見が変わってもよい）、②報告のスキル（クラス全員の子どもの名前を挙げながら、同じ遊びでも遊び方は個々の子どもによって違うことに注目しながら報告する）、③聞くスキル（相手を批判したり、論争しようとしたりしない・意見を押し付けない・共感に努める・園長や先輩が若い人を導く形にならないようにする）、④ファシリテーションのスキル（関係論的発達観をもって、否定の中に肯定を発見する姿勢をもつ）。

5. おわりに

本研究に取り組んだ先生は「保育カンファレンス後に子ども達と関わるのが、更に楽しくなった。」「色々な先生の話聞くことで、自身の子どもの見え方が変わった。」等、保育が楽しくなり、手応えを感じている。まさに、子どもの姿を語れば楽しくなって、保育がかわっていつている。それぞれの園にあった形でぜひいろんな園でも実践してほしい。